

《論文》

自由学園のカリキュラムからみる 教育内容についての考察 (1) ——創立期 (大正期) に注目して——

福原 充

I. はじめに

戦前期における日本の新教育運動、いわゆる大正自由教育運動は、日本の教育方法における近代化に影響を与えた教育運動であると考えられてきた。

近年においては同運動を「国際新教育運動の一環として捉え、その教育学的意義を思想史的な捉え直しによって明らかにすることを試みたい」⁽¹⁾といった、教育運動の主体者であった実践家の「思想」を精査し検討することで、これまでとは異なる視点から新教育運動を捉え直そうとする研究成果がでてきている。

また、実践の思想研究だけでなく、当時の新教育学校の学校運営（授業）でどのようなカリキュラムが展開されていたのかという点について、授業案、授業を受けた生徒達の言説や、教師たちが実施した授業に関する考察等、あらゆる視点から検討することで、方法としての近代化ではなく、個々に展開された教育実践と教育思想の関係性を明らかにしようとする研究動向も生まれてきている⁽²⁾。さらに、学校教育の枠にとどまらず、社会改造運動としての新教育運動の展開に着目し、その歴史的な性格を問い直そうとする研究もある⁽³⁾。本論文もそこに位置するものである。

本論文で検討する自由学園（1921年創立）も、この戦前期における新教育運動の代表的な学校の一つとされてきた。しかし、先行研究では、斉藤（1988）や小関（2015）のように、創立者の思想や自由学園に関連す

る外部団体の活動に注目したものが多⁽⁴⁾。また、中島(2003)年のように、近代的市民の形成と教育の関係性を検討し、自由学園で学んだ卒業生の意識調査から、同校の教育の特徴は生徒達に「新しい良妻賢母主義」ではなく「人格の独立」の影響を与えたことだとする研究成果もある⁽⁵⁾。

しかし、自由学園を新教育運動として歴史的に位置づけていこうとするには、教育思想の特質だけではなく、その教育思想を裏打ちするカリキュラムがどのように構成され、そのカリキュラムをどのような講師が担っていたのか、その点にまで考察が及ばなければならない。

自由学園の教育活動の特徴は、創立者である羽仁吉一・羽仁もと子(以下、羽仁夫妻)が『婦人之友』(1906年創刊)をはじめ、多数の雑誌や書籍を出版していた婦人之友社の経営者であったことから、その教育活動も多様な社会活動と連関しながら発展的に展開したことにある。それは、各種学校として創立し、創立期においては、いわゆる「教師」ではなく、それぞれに活動の拠点がある講師陣によって授業が運営されていたことにも表れている。そのため、この点に自由学園の特質があるならば、具体的な教科や講師陣について明らかにしておかなければならない。

本論文では、以上の点に主眼を置き、自由学園の創立当時(大正期)のカリキュラムや各科目の教育内容がどのようなものだったのか。講師陣には、どのような人物がいたのか。生徒たちは自分達が受講していた授業や活動をどのように受け止めていたのか等も取り上げながら『婦人之友』誌上での関係者の言説、当時配布されていた自由学園の要覧、生徒達がまとめた出版物等を通して自由学園のカリキュラム内容を検討する。

自由学園の教育思想とカリキュラムの関係性を創立者及び講師陣、生徒達の言説から検討することで、これまで検討されてこなかった自由学園のカリキュラム内容に迫りたい。一つの実践校の事例ではあるが、教育思想や教育方法だけでなく、教育内容(実践)がどのように連関し、構造的(あるいは有機的・相補的)な教育活動として構成されていたのかを明らかにすることで、新教育運動の位置づけを問い直す一助につながっていくと考

えている。

Ⅱ. 自由学園創立時の設立理念とその特徴

1. 自由学園の創立と支持基盤

新教育運動は、大正デモクラシーの影響もあり、その主な支持基盤は新中間層であったことはよく知られている。自由学園においても、それは例外ではない。羽仁もと子自身、自由学園の創立を『婦人之友』の誌上において、「女学校と、それから四年または五年の女学校を卒業した方々のために、新時代の文化に伴ふ婦人の修養を資するために、最も適切な講習会を開設したい」と述べており、「中流家庭」の女性たちを「出来るだけ社会と接触」させていくことを一つの目的とすると発表している⁽⁶⁾。

また、西川（2001）が明らかにしているように、1920年代から1930年代に自由学園に入学していた家族の特徴として、①母親の職業は一貫して「無職」が大半を占めていたこと。②父親の職業は公務自由業及び会社員、銀行員といった、新中間層の割合が常に多数を占めていた点がある⁽⁷⁾。

創立者の一人である羽仁もと子（以下、もと子）が自由学園の創立を誌上で発表したのは、1921年の2月であった。同年の4月15日には本科の入学式（26名）、5月5日には高等科の入学式（59名）を実施していることから、創立時、実際に生徒を募集する期間は2～3ヵ月しかなかったことがわかる。

開校直前の創立発表であるにも関わらず、入学する生徒たちが一定数集まった背景には、『婦人之友』創刊前の羽仁夫妻の活動にその理由があると考えられる。

羽仁夫妻は『婦人之友』の前身である『家庭之友』（1903年創刊）時代より雑誌というメディアを活用した社会活動を展開してきた。特にキリスト教関係者等による社会活動に自分達（『家庭之友』においては特にもと子の活動との関連性が多くみられる）も参加し、その活動に学びながら少しずつ独自のものへと発展させていったのである⁽⁸⁾。

そのため、自分達が発行する雑誌を活用し、その読者とともに活動を展開する手法は自由学園創立前からみることができる。実際に、羽仁夫妻は自由学園を創立する以前にも読者を集めた運動会を開催する他、様々な活動を展開しつつ、読者と直接交流する機会を重視していた⁽⁹⁾。

以上のように、自由学園を創立する時には、雑誌読者を中心とする一定数の支持基盤が既に存在していた。内在的に共通した志向を持つ人々が集まりやすい環境にもなるため、入学者及びその家族には、一つの「集団」として社会活動を展開することへの素地があったのではないかと考えられる。

2. 『婦人之友』の誌上と公文書からみる創立時の自由学園のかたち

それでは、羽仁夫妻が『婦人之友』の誌上で発表した教育内容や東京府に提出した学校設立許可申請書の内容から自由学園という教育機関のかたちをみてみよう。まず、『婦人之友』の誌上では、1921年の2月号から創立直前の4月号までの3ヶ月間で自由学園の教育概要が発表された。

当時、『婦人之友』は、毎月1日にその月の号を発行していたが、読者に向けて自由学園創立に関する具体的な教育内容が提示されたのは2月号と4月号である。2月号では主に尋常小学校卒業生を対象とした自由学園女学校(本科)について発表し、その後4月号において高等女学校卒業生及び同等の知識を有する者が通う「文学科」と「家庭科」の構想とその教育内容が発表された。

ちなみに当時の学校設立許可申請書(以下、申請書)を確認すると、「女学校」と明記された欄に斜線が引かれ、「本科」と修正されている⁽¹⁰⁾。

実は、最初に自由学園の創立を発表した2月号では、「女学校と、それから四年または五年の女学校を卒業した方々のために、最も適切な講習会を開設したいと思います」といった記述にもあるように、学園という総合的な女子教育機関の創立を発表しつつも、「本科」以外の具体的な教育内容については未確定な部分があった⁽¹¹⁾。

それは、「自由学園の高等学部は、その時の卒業生の示す程度によって

改めて考へなくてはならない」といった、本科と連続した教育機関を構想しつつも、「併し、今の女学校の卒業生がもっと上の勉強をしたいと思って大勢がその道を探しています、一日一ぱい学科の中に没頭する生活を、この上数年の間に続けるという道ではなしに。私共の長女にしても今その境遇にいるのでございます」⁽¹²⁾という言葉からもわかるように、高等女学校を卒業した後の「新しい学び方」を求めている女性を対象とした教育機関の必要性をもと子自身が自覚し、検討していたことに原因があると考えられる。

申請書において「女学校」に斜線が引かれ、「本科」と修正されているのも、「学園」という教育機関の中身を模索した一面であるともいえるかもしれない。

羽仁夫妻が学校設立許可申請書を提出したのは3月24日（受収28日）であり、認可されたのが4月13日であったため、公的に教育機関であると認められたのは、4月15日の本科の入学式直前であった⁽¹³⁾。2月号での自由学園創立発表時から教育機関としての構想を具体化していったと考ええると、学校設立の申請も実に短期間で行われたことがわかる。

『婦人之友』誌上で発表された各科の教育目的と申請書に記された自由学園の教育課程の方針をまとめると以下の表1の通りとなる⁽¹⁴⁾。

表1 創立時における自由学園の教育課程一覧

教育課程 [一学級定員]	入学年限	教育目的
本科(五ヶ年) [40名]	尋常小学校 卒業生	全く新しい家庭的友情的気分の中で、高等女学校が掲げている同種同程度の学科目を展開しつつ、生徒の生活を出来るだけ社会と接触させることで、自らを教育することに熱心となるように導くこと
文学科(二ヶ年) [15名]	修業年限四ヶ 年以上ノ高等 女学校卒業生 及之ト同等ノ 学力ヲ有スル 者	特に学問に興味を持ち、家庭の人となつてからも、或は文筆に親しみたいという希望を持っている者、社会事業に携わる機会があったらと望んでいる者
家庭科(二ヶ年) [40名]		新時代に適應する家庭婦人としての修養をしたいという者

※出典：「教育課程」及び「入学年限」は『東京都公文 大正十年 私立学校 冊ノ六』 東京都公文書館蔵 1921年 pp.60～64より作成。また、「教育目的・対象」については羽仁もと子(1921)「『自由学園』の創立—私共同志の新事業に御賛成を願ひます—」『婦人之友』第15巻 第2号 婦人之友社 pp.4～5(「本科」部分)、羽仁もと子(1921)「女学校を卒業した方々へ」『婦人之友』第15巻 第4号 婦人之友社 p.8(「文学科」・「家庭科」部分)に明記されている文章を要約した。

ここで重要なことは、先に述べたように構想段階において「高等学部」と説明していたものを申請書においては目的に応じて「文学科」と「家庭科」の2つにわけたことである。職業人の育成も含め、具体的な社会事業に携わる人材を育成する「文学科」と家庭婦人を育成するための「家庭科」といったように、新時代の女性を育成するにしても、必要となる能力は卒業後の生活によって異なることを羽仁夫妻は自覚していた。

それは、「本科」や「家庭科」の定員が40名であるのに対し、就業も含め、社会的な活動への参加を想定した「文学科」は15名とし、より少人数での教育を展開しようとしている点からも読み取ることができる。つまり、どちらを選ぶにしても、新時代における良妻賢母とは異なる「家庭婦人」の育成を羽仁夫妻は目指していたのである。そのため、自由学園での学校生活では、「家族」を重視した生徒たちの自治的な運営が重視された⁽¹⁵⁾。

1924年には羽仁夫妻の自宅を建て替え、寄宿舎制も導入している。

この「高等学部」の構想においては、創立までの期間の短さも影響してか、本科からの連続性という側面と「新しい学び方」を必要とする女性のためといった二つの側面について案が考えられていたが、創立時においては後者に重点を置いたことになる。しかし、この「文学科」と「家庭科」という枠組みは、後に述べるように創立後直ちに修正されることになる。

それでも、「職業教育ということも、羽仁両先生のお考えの中にはあって、働きたいという希望のある人には、それぞれの個性と希望とに応じてよい働き場を紹介して下さいました。婦人之友や子供之友の編集に携わった人も数人あり、自由学園の教師になった人もあります」⁽¹⁶⁾という卒業生の言葉や、「高等科二年生（1回生）の人達の手記が婦人之友に載りはじめる。これは一真剣に営まれている職業を通して社会を見せてやりたい、そうしてそれから生きた学問をさせてやりたい。—というミセス羽仁のお気持ちからであった。」⁽¹⁷⁾という記録からもわかるように、羽仁夫妻が教育機関を卒業した後の生徒達（女性）の生活が社会とつながるように、在学時からの記事の執筆（取材も含む）を実施するなど、直接社会と関わる学びの仕組みを「本科」も含め、自由学園の教育として構築しようとしていた。これらのことは、羽仁夫妻、特にもと子自身が学生時代、明治女学校に通いながら記者としての実力をつけていった経験と無関係ではないだろう。

誌上での生徒募集は申請書の提出時期よりも早いため、初年次の募集人数は申請書に記載された定員人数と異なるが、誌上で発表された生徒募集人数からみた時、「本科」の定員30名に対し26名が入学していたことと比較すると、「文学科」（定員10名）と「家庭科」（定員30名）は、2科合わせて定員の40名を超える59名が入学したとされている⁽¹⁸⁾。このことから当時の女性にとって、高等女学校を卒業した後に通うことができる教育機関は魅力的なものであったことがわかる。実際、「文学科」と「家庭科」の一回生は「年齢も学科も進度もまちまちの、多数の人が集まった」

という⁽¹⁹⁾。

以上のように、創立時の自由学園の特徴は、「実際生活と没交渉な教育法」⁽²⁰⁾である当時の女子教育に変わる新しい教育の実施を基本としつつも、尋常小学校卒業者を受け入れる「本科」のみの教育機関にとどまらなかったことである。羽仁夫妻は創立当初から高等女学校卒業者のために、雑誌記事の執筆や取材等の就業経験も含め、直接社会と関わりながら学ぶことを視野にいたした「文学科」や「家庭科」といった、「本科」も含め、学齢期が2段階に別れる「3科」を一つの「学園」にして創立した。これらは、羽仁夫妻自身が継続的に実施してきた事業を基盤としたものであると共に、「子ども」ではなく、「婦人」を中軸にしながら活動を展開してきたからこそその発想であるといえる。

新しい時代に即応する女性の教育を、社会や実生活と連関させ、単に教育方法にとどまらない女性の生き方という広い視野から構想し、実現させようとしたところに新教育運動における自由学園の特徴がある。

Ⅲ. カリキュラムの概要と講師陣の特徴

1. カリキュラムの概要と「科」の変更

それでは、創立時における教科のカリキュラムにはどのような特徴がみられるのだろうか。申請書や自由学園が入学希望者向けに配布した要覧を参考にしつつ、実際のカリキュラムの概要と講師陣から、教科目が教育内容とどのように連動していたのかを検討したい。まずは創立時の3科の学科目と学科課程及び教授時間数を表2で確認してみよう。

本科については、もと子が『婦人之友』の誌上で述べていたように、当時の高等女学校令程度の時間数と科目が設定されている⁽²¹⁾。また、水野(2009)の研究で紹介されている当時の高等女学校にみられるように「国語」や「家事」、「家政」、といった科目に教授時間数を多く設けている点については自由学園も同様である⁽²²⁾。しかしながら、高等女学校等との比較で注目すべきは「本科」にみられる「芸術科」や「実際科」、「文学科」の「市

表2 自由学園における学科目、学科課程及び教授時数一覧

本科（学科目、学科課程及教授時数）										
	修身 【1】	国語 【5】	英語 【4】	数学 【4】	歴史 【1半】	地理 【1半】	理科 【2】	芸術科 【4】	実際科 【5】	体育科 【3】
第一学年 【31】	生徒ノ思想及ビ実生活ノ指導	講読作文	読方、訳解会話、習字	算術	日本歴史	日本地理	自然科学入門	絵画音楽	家事、作法、裁縫、手芸、料理、手工	体操衛生
第二学年 【31】	同上	同上	同上	算術	同上	世界地理	同上	同上	同上	同上
第三学年 【31】	同上	同上	読方、訳解作文、習字	代数算術	外国歴史	同上	日常生活ニ於ケル科学	同上	同上	同上
第四学年 【31】	同上	同上	同上	幾何代数	同上	同上	同上	同上	同上	同上
第五学年 【31】	同上	同上	同上	幾何代数	綜合歴史	地理概説	自然科学総論	同上	同上	同上

文学科（学科目、学科課程及教授時数）								
	実践倫理 【1】	英語英文学 【12】	文学 【2】	美術哲学 【1】	政治経済及社会問題 【1】	市民学 (Civics) 【1】	音楽 【1】	体操舞踊 【1】
第一学年 【20】	学生ノ思想及ビ実生活ノ指導	読方、訳解、会話、作文、文法	名著講解 文藝批判	美術史	新聞研究	講義、研究、見学	声楽	記載なし
第二学年 【20】	同上	作文、文法、訳解、精読、英文学、時事問題	同上	哲学概論	同上	同上	同上	記載なし
科外	文章会（毎月2回） 文化講座（毎週4時間）							

家庭科（学科目、学科課程及教授時数）								
	実践倫理 【1】	英語 【4】	家庭科学 【2】	文学 【2】	政治経済及社会問題 【1】	裁縫、手芸、料理 【5】	音楽 【1】	体操舞踊 【1】
第一学年 【17】	学生ノ思想及ビ実生活ノ指導	会話訳読	自然科学入門	名著講解 文学批判	新聞研究	講義、実習	声楽	記載なし
第二学年 【17】	同上	同上	日常生活ニ於ケル科学	同上	同上	同上	同上	記載なし
科外	家庭及社会見学（毎月1回） 文化講座（毎週4時間）							

出典：『東京都公文 大正十年 私立学校 冊ノ六』 東京都公文書館蔵 1921年 pp.66～65
より作成。

【】内は授業時間（週）数（学年の下の数字は各学年の合計時間数を意味する）。

民学」、「文学科」・「家庭科」双方にみられる「政治経済及社会問題」、また「科外」として用意された「文章会」と「文化講座」、「家庭及社会見学」等の存在である。

後年の評価となるが『東京の各種学校』（1968）において、自由学園が他の大学等に先駆けて「市民学（Civics）」をカリキュラムの中にとり上げたことが「特筆に値する」⁽²³⁾と評価したように、科目の内容が実際の社会や生活と連動するように設計されていたことが自由学園のカリキュラムの特徴である。「市民学（Civics）」を担当した生江孝之の講義ではセツルメントの事等を講義した後、貧民窟や社会事業施設の見学にも出かけていたという⁽²⁴⁾。

また、「文学科」の「英語英文学」については、教授時間数が12時間となっており、他の科目と比べ、集中的に学べるようになってきている。自由学園の入学者が新中間層であったことや、「文学科」は将来、文筆の仕事に就くことや、社会事業に携わることを目的に創設されたこと等を考えると、「英語」が新しい婦人に必要な能力の一つとして重要であると羽仁夫妻が判断したといえる。

この「英語」も実生活とのつながりが重視されており、『婦人之友』の誌上では「英語の時間の外に音楽体操のある時間などに西洋人に来て頂いて、英語を用い、会話実習の便利をはかる積り」であると明記されている⁽²⁵⁾。

事実、自由学園では読み書きの他にも学園生活の中で行われる料理や体操等で英語が学べる機会を設けており、1回生の卒業勉強として英語劇を帝国ホテルで公演（1922年）したり、英語新聞『The Gakuen Weekly』（1925年創刊）を刊行したり等、授業での学びが日常の学園生活や社会と連動するような工夫が各科目で考えられていた⁽²⁶⁾。

更に興味深いのは「文化講座」である。申請書に「文化講座ハ一般ノ聴講ヲ許スコト（聴講者定員五十九 聴講料一期毎 金十円）」⁽²⁷⁾と明記されていることから、聴講料を払えば生徒以外の者も授業に参加できた。実

際に外部から何人が聴講したのか、あるいはどの程度継続して参加したのか等は今後更なる調査が必要ではあるが、羽仁夫妻が「新しい学び方」を求める女性たちのためにより多くの婦人が参加できる環境を用意しようとしていたことがわかる。「文化講座」では、1週間に2回2時間ずつ、政治、法律、経済、宗教、文学、美術など、各専門の大家を講師として呼び、連続した講義を行うとされた⁽²⁸⁾。

以上のように、各科目のカリキュラムの概要からもその科目が授業で終わるのではなく、卒業後に社会的な活動を展開することも見据え、実際の生活と科目とが連動する教育展開を考えていたことがわかる。

一方で「文学科」と「家庭科」については1923年の自由学園の要覧では「高等科」(2ヶ年)と「高等科予科」(1ヶ年)として課程自体が変更されている⁽²⁹⁾。

表3 自由学園の「学科目と授業時間」1923年

本 科		高等科及予科	
学科目	時数(週)	学科目	時数(週)
国 語	5	英 語	8
英 語	5	文 学	4
数 学	3	哲 学	
歴史地理	2	自然科学	2
自然科学	2	法 制	3
美 術	2	経 済	
手芸裁縫料理	6	社会問題	2
音 楽	3	音 楽	
懇 談 (修身に代わるもの)	1	体 操	2
科外(習字)	毎月15分	実 務 (手芸裁縫料理を含む)	6
合 計	32	修 養 会	2
		合 計	29

出典：『自由学園 自由学園の教育・学制・学則 大正十二年(1923)』自由学園 1923年 自由学園資料室 保存資料 p.3より作成

左記の表3は、同資料に記載されていた「本科」と「高等科」、そして「高等科予科」の学科目と授業時間数を表にしてまとめたものである。なお、この課程の変更自体は創立2年目である1922年の時には既に実施されていたようである⁽³⁰⁾。

1921年の申請書の内容(表2)と比較すると、学科目の内容が簡略化されて明記されていることや、時数に変更されていることがわかる。

「本科」については、合計の時数(週)が1時間増えて32時間となり、

新たに科外の科目として「習字」が追加されている（毎月15分ずつ学科の済んだ後で取り組むこと以外、詳しい説明はされていない）。

また、「高等科」及び「高等科予科」については、「文学科」と「家庭科」の20時間または17時間から29時間に増えていることがわかる。ちなみに「高等科」と「高等科予科」の定員については、合わせて40名と記載されており、創立時からの変更はみられない。

表3の資料では、「高等科」について「本科の五年を修業すると、本人の希望によって、自由学園本科卒業生としての免状を与へ、高等科に在学するとしなすとは随意でございます。なほまた自由学園の高等科は、他の高等女学校の卒業生で入学を希望する人々をも試験の上で入学を許します」と説明されている⁽³¹⁾。また、「高等科予科」については「高等科一年の下に予科の設けがあり、四年程度の高等女学校を卒業した方は試験をうけてこゝに入ることが出来ます。一略一予科の修業年限は一年でございます。予科の課程を終った人は、無試験で高等科に進むことが出来ます」と明記されている⁽³²⁾。

羽仁夫妻は自由学園創立2年目に課程のかたちを変えたことになるが、課程の目的自体は「自由学園の高等科は、今の高等女学校の卒業生に、現在の社会に一人の女性としてよき生存をなすために大切な修養をさせる所でございます一略一思想や芸術に対する理解と、健全な宗教心を養ってゆくことが、現在の人間として最も進歩した生き方だと思ふ考えによって学生を指導」するとして、社会問題や日本の政治経済を学ぶことや日常に差し支えない程度までの英語力つけること、皆が一つの家族のように共に生活することを重視するなど、大きな変更はみられない⁽³³⁾。

つまり、羽仁夫妻は婦人の「新しい学び方」としての「文学科」と「家庭科」の理念を残しつつも、もう一つの構想にあった本科からの連続した教育機関に重きを置くことにしたのである。それは、教育機関としての学びの連続性とその枠組みをより明確にすることで、自分達がつくる教育カリキュラムの教育効果を高めるとともに、学校としての安定的な運営を考

慮してのことであつたと考えることができる⁽³⁴⁾。

自由学園の創立期はカリキュラムの内容とともに、学校それ自体をどのように運営していくか模索していた時期でもあつた。そのなかで羽仁夫妻は社会や実生活を意識し、これらが有機的に連動するカリキュラムを求め、それを安定的に維持する方法を選んだのである。

2. 講師陣とその役割

それでは、創立期の自由学園において、各科目を担当したのは、どのような人物だったのだろうか。1921年2月号の『婦人之友』の誌上では、羽仁夫妻と関係が深い植村正久の娘、植村環が英語の主任を引き受けたことや、成城小学校を参観した際、数学の教え方に共感し、澤柳政太郎に東北大学を卒業した牧田らく子を紹介してもらったこと、ある夏、軽井沢に「宗教的修養」で赴いた際に、宿舎での生活を引き受け、年齢が異なる40人くらいの人々を楽しく過ごしてさせたという点から声をかけた齋藤その子、自分達の雑誌である『婦人之友』で洋服等の記事（製作含む）を担当していた西島芳太郎に洋服類の稽古を担当させる等、矯風会をはじめとするキリスト教等の関係者だけでなく、自分達がよいと思った人物に積極的に声をかけていた⁽³⁵⁾。

表4は、1923年の自由学園の要覧に明記されていた講師とその担当科目の一覧である。一人でいくつかの科目を担当する場合もあるが、既に述べたように、英語に関する講師は10名と他の科目に比べ、特に充実させていたことがわかる。

同資料には、「教授講師及び科外講師」というタイトルで各科目の担当者名が明記されている⁽³⁶⁾。タイトルからも読み取れるように、自由学園の教科目を指導する多くは講師であつた。実際、「学園では、良い教師を得ることに十分に骨を折っております」といった記述や「各学科の担任教師の大部分は、各専門家の中でも特に秀でられた方々です」といった内容を要覧などに明記し、各分野における秀でた専門家に自由学園の教科目を

表4 1923年の自由学園の要覧に記載された各科目と担当講師一覧

科目 (担当者数)	講師	科目 (担当者数)	講師
英語 (10名)	安部京子 呉なへ子 (パチェラー・オブ・アーツ) 川戸 環 (パチェラー・オブ・アーツ) 熊本謙二郎 ミセス・コールドウエル 松岡久子 ミス・ミリケン ミス・マクドナルド (パチェラー・オブ・アーツ) ミス・マクナメラ ミセス・ショウ	音楽 (2名)	松平さと子 ミス・マクドナルド (パチェラー・オブ・アーツ)
英文学 (1名)	岡田哲蔵	体操 (1名)	ミス・マーシャン
国文学 (1名)	別所梅之助	社会事業 (1名)	生江孝之
時事問題研究 (1名)	羽仁吉一	歴史 (1名)	西村真次
国語 (1名)	羽仁もと子	文化人類学 (1名)	
数学 (2名)	羽仁もと子 竹内潔 (理学士)	裁縫 (1名)	西島芳太郎
修養会指導 (1名)	羽仁もと子	法制経済 (1名)	野村信考 (法学士)
哲学 (1名)	出 隆 (文学士)	地理 (1名)	奥秀三郎
衛生 (1名)	廣川松太郎 (医学士)	料理 (2名)	小倉勝太郎 田中よね子
自然科学 (2名)	堀江賢二 和田八重造	体操 (1名)	榊原 清一 (陸軍歩兵中尉)
手芸 (2名)	河野富子 佐々木操	文学 (1名)	齋藤 勇 (文学士)
美術 (2名)	山本 鼎 桑重儀一	物理学 (1名)	竹内 潔 (理学士)
習字 (1名)	山崎光子		

出典：『自由学園 自由学園の教育・学生・学則 大正十二年（1923）』自由学園
自由学園資料室保存資料 1923年 p4より作成。

担当してもらうことに力を注いでいたことがわかる⁽³⁷⁾。

つまり、羽仁夫妻が自由学園の講師に求めたものは、教員の資格ではなく、その科目について秀でた専門性や実力がある人物であり、その内容が実社会で活用できるのかどうかであった。その意味において、当時、農民美術運動や自由画教育運動で有名であった山本鼎や新教授法で注目されていた和田八重造等が講師陣に名を連ねているのは羽仁夫妻らしい人選であったといえる。また、講師達の役割は単に自分が担当する科目の教授をするのではなく、講師たち自身が自由学園の教育を理解することが重要であった。例えば、山本鼎とともに美術の時間を担当していた木村莊八は生徒たちが自由学園での生活を冊子にまとめた際に、美術教師としての自分の役割を以下のように述べている⁽³⁸⁾。

学園美術科の方針は能ふ限りその生活有機体なる特質を絶へず練磨したいにあると考えていますが、と云うのは、学生達の間にと交ると、我々教師自身、敏活に、有機的生活の氣息を吸ふ。我々にこれある限りは、方針は生きて機に依じて変転せしめ得ると思はれますので、何しろ、およそ学校の教師と称するものは、之れ程身自ら生きてゐる必要あるものはなからうと感じられる。一と、この勉強こそは、常に欲するところなので、これが自分に出来さへすれば、教師たるを得、従つて美術科の方針も枯死しないとあれば、欣ぶ如き成。私はその意味で教師たり得たいと願っているのです。

木村の記述の中で注目したいのは、自由学園が重視している科目と社会または生活との関連性を理解していたことと、木村自身が教師であると同時に自由学園での生活を生徒たちと共に過ごす一員となっていることである。村上(2014)の研究等⁽⁴⁰⁾にもある様に、自由学園の美術教育はその後、自由学園工芸研究所の設立など、授業の枠を超え、社会活動として発展的に展開するが、その活動自体も美術講師達が一緒に参加しているのである。

こういったことは美術の科目だけではない。例えば1922年の7月21日から30日まで婦人之友社主催で実施された洋服裁縫の講習会では、自由学園で裁縫を担当していた西島芳太郎が講師を務めている⁽⁴¹⁾。西島は婦人之友社に所属しているため、当然ともいえるが、西島自身も自由学園での授業だけでなく、婦人之友社の事業に参加していた。

表5の要覧では、自由学園での教科目は「自由学園の知的学術的方面的教育」⁽⁴²⁾であると記されており、その後以下のように説明されている⁽⁴³⁾。

単に知識の供給所でなく、本当の学校といふ団体には、その団体のもつ実生活がなくてはなりません。学生は其中で、教場で習ったさまざまな知識によって養はれつゝ、日々その理想や考へ方やいろいろの技術の新たになって行く自分を生かし、自分の力を実生活にあてゝ見ては、自分の本当の実力を試みつゝ、進歩しなくてはなりません。学科より得る知識と、それを応用しつゝ生きて行く実生活と、その二つの力で本当の自分といふものが成長して行く筈だと思ひます。

つまり、自由学園では、現代的に解釈すれば、正課外教育と正課教育を統合したカリキュラムを展開していたのである。そのため、講師陣は単に科目を担当するだけでなく、状況によっては自身も社会的な活動に共に参加する、あるいは教室を飛び出した現場での活動を担当するといった役割を担うことになる。それは自由学園が多様な社会活動を展開する一つの基盤を講師のフィールドからも得ていたともいうことができる。羽仁夫妻は各領域に秀でた人物を講師として招聘することで、生徒たちに「本物」をみせるだけでなく、実際に体感させようとしていたのである。

また、生徒達自身も授業だけでなく実社会で学べる環境に手応えを感じていたようである。1925年に高等科3回生の卒業勉強として、全学年が協力して実施した当時の東京府北豊島郡高田町における貧乏状態・衛生状態の調査は、「自分の家と学校と云ふものより他を知らない、考へること

表5 1925年の『自由学園 要覧』に記載された科目担当者と
その目的及び内容の一覧⁽³⁹⁾

科目 (担当者数)	科目担当者	目的及び内容	主担当の科
国語 (3名)	三宅淑子	「読む力をつけるために」取り組む。	本科
	渡邊吉治 (文学士)	「主として現代のさまざまな種類の文章を味はせるやうに」教授。	記載無
	羽仁吉一	時勢に対する理解と判断の力を確かにするため、「多く毎日の新聞に報道され論評される事実を材料として、その中に出てくる言葉の意味や、事柄の内容など」話す。	本科 高等科
哲学 文学 (3名)	中川景輝 (文学士)	「主として哲学及び宗教に関する名著を読むことを指導」する。	高等科
	渡邊吉治 (文学士)	「美術史」を担当	
	別所梅之助	「国文学」を担当	
数学 (2名)	渡邊秀雄 (理学士)	記載無	記載無
	羽仁もと子	専門的な知識を教えるというより、専門的(機械的)な教授ばかりを受けた中等学校の教育から脱するように、算術を指導する。	特に本科1年及び 新入生1年生
英語 英文学 (9名)	川戸環 (バチェラー・オブ・アーツ)	「本科一年と二年は、各五時間の英語を、教師会の評議した方法に基いて、ミス・ウエルスとミスタ・ゴントレットとで、全部を受け持って」いる。それは、「発音その他最初の出発を完全にしたい」ためである。 「上級には、西洋人の時間は三時間で、段々と訳の時間が五六時間または七八時間」とする。	学園英語大体責任者
	吳 なへ子 (バチェラー・オブ・アーツ)		学園英語大体責任者
	東ヶ崎一枝 (バチェラー・オブ・アーツ)		記載無
	川村道子		川戸及び吳の助手的役割と生徒の勉強の手助け(学園卒業生)
	熊本謙二郎		読解力
	岡田哲三		上級に対し詩と文学的読物
	ミセス・プライス		記載無
	ミス・ウエルス		本科1、2年
自然科学 (3名)	和田八重造	「大概一学期に一つづつ、の問題を選んで、子供たちが、自発的にそれを研究するやうに、科学的立場から、その道筋を指導すること」に努める。	記載無
	堀江賢二		記載無
	内藤貞子	毛虫の飼育及び観察、自動車の構造や天文等学ぶことが明記されている。	助手的役割 (学園卒業生)
歴史 (1名)	西村真次	「その専門の人類学的立場から、太古より今日に至った、人類及びその社会的発達及び変遷の大体を講じ、子供たちが、生れなかった以前の自分と、その社会を知るやうな興味を以って」学ぶようにする。	記載無

自由学園のカリキュラムからみる教育内容についての考察 (1)

科目 (担当者数)	科目担当者	目的及び内容	主担当の科
地理 (1名)	田中薫 (理学士)	「下の組には、方位の見方や地図の見方というような、出来るだけ手近な材料によって、その地理学的興味を養はせるやうにし、上級になると、まづ太平洋を中心とした、さまざまな地理学的問題を、成るべく学生自身に研究させ」、「日本の世界に於ける位置をハッキリ」と知らせるようにする。	記載無
美術 (3名)	山本鼎	土曜日の午前に実施。「我々の目にふれるあらゆるものゝ中から、段々深くその美を見出して行く眼を養ひ心を培ひ、その感得した美を、絵画に図案に服装に、室内装飾その他の簡単な工芸にまで応用し表現することが出来るやうに、諸種の製作を奨励」する。	記載無
	桑重儀一		記載無
	木村荘八		通常の指導の他、上級に美術史を教える
音楽 (2名)	鈴木信子	記載無	すべてのクラス
	松平里子		
体操 (1名)	ミス・ケリー	「身体各部の発達をはかり、動作を激活に軽快にする」ことを指導（鍛えた身体を持っている若い外国婦人が適当だとする記述がある）。	記載無
習字 (1名)	山崎光子	「自己表現の一つの技術として習字を学」ぶ。「各級とも毎日放課後十五分づつ習字をする」こととし、「隔週に一度山崎氏の批評と教授」がある。	記載無
裁縫 手芸 料理 (6名)	青芳とみこ	「和服裁縫」	記載無
	西島芳太郎	「洋服」	記載無
	河野富子	「手芸衣類整理洗濯法など」	記載無
	佐々木操		記載無
	小倉勝太郎	「料理の教授」	記載無
	土倉静子		記載無 (学園卒業生)
懇談 修養 (1名)	羽仁もと子	この科目は「修身倫理といふ科目」にあたる。「本科一年から高等科二年まで、修養と懇談とが各組に一週間各一時間づゝ」ある。「修養の方は、それぞれの年齢及び事情によって、主に古来の有名な諸種の文学、小説類を共に読み、我々の人間性及び個性の立場から、心を一つにして深く味ひ、真に我々の内部から、自分を正直に点検して、本当の意味に於て我を養ひ、進歩をはかり、また改造もして行きたい」という考えがあり、「懇談は、めいめいの身邊に起ったさまざまな事実について、打とけてその感想を語り合ひ、実地についてお互い相助け相愛しあふ道をたづねて行こうとする時間」とする。	全科
特別講座 (複数名)	各専門の大家	「高等科在学二年の間に、科学について、政治、経済及び社会上の主なる問題について、現代思潮の一般について、今の文化に深い関りを持っている知識、学説の大体を要領よく理解させるために、一学期に一科目又は二科目づつ、十回乃至十二回完結の特別講座を設け、各専門の大家を講師として、やゝ組織立ちたる講義を聴くこと」とする。	高等科

出典：『自由学園要覧』自由学園 1925年 pp.2～9より作成

ばかりして実際にあたらなかった自分は、段々自分の働く範囲が広がって、実際に自分の力を試みる時だと思ったら本当に希望に満ちたうれしい気がしたのでした。仕事は楽しく有益に運びました。」と、現場での学びに満足している様子が伺える⁽⁴⁴⁾。これは、市民学や文化講座等の科目の延長にある活動であったと考えることができる。生徒達は「社会事業をするにしても、何の仕事をするにしても一略一私たちが各々住む町村の事情に通じ、その幸福と改善を希ふ心の奥くあることによって、はじめて十分に行使されることが出来るもの」⁽⁴⁵⁾であるということを実感していた。

自由学園の教科目は一定程度自由学園の教育に理解があり、その専門分野に秀でた人物が講師となって運営されていた。もちろん各科目を担当する講師はその年によって変更されることもある。羽仁夫妻は新教育学校のなかでもコーディネーター力に長けた教育者・経営者だったといえるかもしれない。一方で別の見方をすれば、自由学園の教育展開は、講師達の尽力が大きかったともいえる。

自由学園の教科目を担当する講師達は、自由学園の教育を理解するとともに、生活教育と関連するように自身が担当するそれぞれの教科目を「知的学術的方面の教育」として位置づけることが役割として求められていたことが要覧から読み取れる。それは単に自由学園の外の生活や社会と直結することだけではなく、自由学園の中での生活を基盤とし、そこから発展的に展開するような工夫も必要とされるものであった。自由学園のカリキュラムは、講師たちの専門性を教室の内外を含めて活用することで、科目全体が学園生活それ自体と連動しながら展開されるように考えられていたのである。

IV. おわりに

自由学園は、その社会活動に注目される傾向がある。また教科目についても特定の科目の展開に注目されて検討されてきた。本論では、教育思想や教育方法だけでなく、これまであまり検討されてこなかった教科のカリ

キュラムが自由学園の教育思想や教育内容とどのように有機的に連動していたのかを大正期を中心に確認してきた。自由学園の要覧等の資料を検討すると、教科目における教育展開が決して単純なものではなかったことがわかる。羽仁夫妻は新しい家庭婦人の育成を目指し、教科目で養う力と学園生活を通して養う力について、その役割を分け、それぞれが有機的に連動するように教育課程やカリキュラムを工夫していたのである。

また、自由学園で講師を担当した人々も単に科目を教える教師として働いていたのではない。彼らにとって自由学園で講師を担当することは、同時に自分自身も社会活動の一員として参加する環境の中に入ることを意味していた。つまり、社会運動を展開してきた羽仁夫妻が創立した教育機関であったからこそ、自由学園の教育カリキュラムは連動的な教育内容となり、そこに関わる人々がある種の運動体として機能する構造が構築されていたのだと考えることができる。その意味において、新教育が気分教育と呼ばれた文脈とは異なる教育活動が自由学園では展開されていたということもできるかもしれない。

本論では大正期の自由学園のカリキュラム概要を申請書や要覧等から検討するといったことに留まり、個別の科目の展開について詳細な検討が課題として残っている。また、カリキュラムそれ自体が昭和期となりどのように変遷していったのか、講師達がどのように変わっていったのか等についてもその教育内容とともに検討が必要であろう。今後の課題として、引き続き研究を積み重ねていきたい。

注

- (1) 筆橋本美保・田中智志編(2015)『大正新教育の思想—生命の躍動』東信堂 p.5
- (2) 橋本美保編(2018)『大正新教育の受容史』東信堂
- (3) 福原充(2014)「新教育学校の創立基盤—自由学園を事例として—」『日本教育史学会紀要』第4巻 日本教育史学会 pp.20~47

- (4) 齊藤道子 (1988) 『羽仁もと子—生涯と思想』 ドメス出版、小関孝子 (2015) 『生活合理化と家庭の近代 全国友の会による「カイゼン」と『婦人之友』』 勁草書房他
- (5) 中島みさき (2003) 「自由学園における『自由人』の形成—女子部卒業生の意識調査を中心に—」 『教育学論集』 第 45 集 中央大学教育学研究会 pp.235～272
- (6) 羽仁もと子 (1921) 「『自由学園』の創立—私共同志の新事業に御賛成を願ひます—」 『婦人之友』 第 15 卷 第 2 号 婦人之友社 pp.4～5
- (7) 西川澄子 (2001) 「1920-30 年代 新中間層の「新学校」支持に関する考察—自由学園にみるもう一つの家族像—」 『〈教育と社会〉研究』 第 11 号 一橋大学〈教育と社会〉研究会 p.56。なお、西川は、自由学園の特徴として、「同一家族内のリピーター率が高い」ことも述べており、経済面だけでなく、思想的にも同質性の高い集団であったことを指摘している (同資料 p.57)。
- (8) 前掲注 3
- (9) 自由学園女子部卒業生会編 (1985) 『自由学園の歴史 I 雑司ヶ谷時代』 婦人之友社 pp.70～72。その他にも当時の記事を読むと散見できる。
- (10) 『東京都公文 大正十年 私立学校 冊ノ六』 東京都公文書館蔵 1921 年 p.51。なお、『婦人之友』 3 月号では、主に校舎 (現自由学園明日館) の紹介と教育空間に関する羽仁の教育思想が記されている。
- (11) 前掲注 6、p.4
- (12) 同上、p.12
- (13) 前掲注 10、 p.51。なお、3 月号の『婦人之友』の「自由学園について」という記事には、「三月五日までは御申込をうける積りでございます」と明記されている。これは、本科の募集をしたところ、最

- 初はその趣旨を十分に理解しないで申し込みをした人がいたことから、入学を希望する生徒の両親のいずれかと面談することにしたという事情も関係している。この点からも初年次の入学者はその保護者も含め、自由学園の創立趣旨を一定程度理解して入学したと考えられる〔執筆者不明(1921)「自由学園について」『婦人之友』第15巻第3号 婦人之友社 p.10〕。
- (14) 申請書には、「入学志願者ハ入学願書ニ履歴書、成績表（本科入学志願者ハ小学校ニ於ケル六年間ノ成績表、文学科家庭科入学志願者ハ女学校ニ於ケル四年又ハ五年間ノ成績表）、最近ノ写真、自作ノ文章一篇ヲ添ヘテ差出スコト」と明記されていることから、当初は、科目の入学試験は特に設けていなかったことがわかる。但し、文学科の入学を希望する場合のみ、「英語ニツイテ試験ヲ行フコトアルコト」と明記されている（前掲注10、p.61）。また、表1で明記した4月号の『婦人之友』の記事では、「文学科」の修行年限は三ヶ年と明記されたが、申請書においては何らかの理由で二ヶ年に修正して提出されている。
- (15) 前掲注6、pp.5～6。なお、その他にも委員会制度が取り入れられるなど、創立時だけでなく、創立後の教科目以外の教育内容とその変遷には今後も検討が必要であるが、本論の目的とは異なるため、今後の研究課題としたい。
- (16) 前掲注9、p.66。なお、「卒業生有志の者が、もう一年勉強させて頂きたいと申し出て、英語と理科の研究科を一年作って頂きました」という記述もあることから、公的な学校設置の申請とは別に、卒業生も含めた私的な教育組織を自由学園のなかに設置することがあったと考えられる（同資料、同頁）。
- (17) 同上、pp.76～77
- (18) 前掲注6、P4と羽仁もと子(1921)「女学校を卒業した方々へ」『婦人之友』第15巻第4号 婦人之友社 p.9。「文学科」と「家庭科」

の入学申し込み期限は4月20日と明記されている。なお、入学人数の確認は前掲注9の年表を参考にした。

- (19) 同上、p.10
- (20) 前掲注6、p.2
- (21) 『学生百年史 資料編』 文部省 1972年 pp.138～139
- (22) 水野真知子(2009)『高等女学校の研究(上)―女子教育改革史の視座から―』 野間教育研究所
- (23) 東京都編(1968)『都史紀要十七 東京の各種学校』 東京都 p.229
- (24) 生江孝之先生自叙伝刊行委員会『わが九十年の生涯』 伝記叢書24 大空社 pp.273～274
- (25) 前掲注6、p.7
- (26) 『自由学園 80年小史』 自由学園出版局 2001年 pp.4～12
- (27) 前掲注10、p.65
- (28) 羽仁もと子(1921)「女学校を卒業した方々へ」『婦人之友』第15巻第4号 婦人之友社 p.8。なお、この時、誌上で自由学園については設立者が羽仁吉一、学園長が羽仁もと子、文学科長が川戸環子、家庭科長が松岡久子であると記されている(同資料、p.9)。
- (29) 『自由学園 自由学園の教育・学制・学則 大正十二年(1923)』自由学園 1923年自由学園保存資料 pp.1～4。なお、学費(年額)は、本科は「八十八円」、高等科と予科は「九十九円」と記載。なお、本科生徒は上記とは別に昼食費として「実費(月額七円以内)」を納付することも明記されている。
- (30) 前掲注9、p.74
- (31) 前掲注29、p.2
- (32) 同上、p.3
- (33) 前掲注29、p.2
- (34) 「高等科」と「高等科予科」を設置する理由については、1930年に学則変更の件について指令を提出した資料のなかで、「一、改正の

理由」として「女学校本科を普通部と改称。文学科及び家庭科を合併して高等部と改称。新たに高等部予科を設置したるは他の高等女学校を卒業して本学園高等部に入学するものをして学風に順応せしむるための訓練を施す必要があるため」と説明されている（『昭和五年 学務課 私立学校 第一種 冊ノ二二〇ノニ』東京都 公文書館 p.263）。なお、この時は財政的な問題から学費を上げるといった事由もあった。

- (35) 前掲注 6、pp.7～9
- (36) 前掲注 29、p.4
- (37) 同上、pp.2～3
- (38) 木村莊八（1929）「教師として」『学園生活風景』自由学園 p.124
- (39) 『自由学園要覧』自由学園 1925 年。なお、同資料には「設立者羽仁吉一」「学園長羽仁もと子」「学監松岡久子」の記載（川戸環が抜ける）がある（同資料 p.26）。なお、この年の募集人数は「本科 第一学年 三十名」、「高等科 第一学年 凡二十名」、「同 予科 凡二十名」と記載されており、生徒定員は「二百名」としている（p.17 他）。学費（年額）については、本科は「金九十六円」、高等科と予科は「金百八円」と明記されている（p.22）。またこれとは別に校費（年額）として全科「金十二円」と食費（月）「金 7 円」が必要であることが記載されていることから、徐々に値上がりしていることがわかる（p.22）。
- (40) 村上民（2014）「山本鼎と自由学園—教育＝運動の現場に立ちつづけた鼎—」『山本鼎のすべて展—「自分が直接感じたものが尊い」の実像に迫る—』上田市立美術館 pp.166～173 頁、村上民（2015）「自由学園草創期（1921～1932 年）の美術教育：羽仁もと子・吉一と山本鼎の協働を中心に」『生活大学研究』Vol. 1 自由学園最高学部 pp.26～44、村上民（2016）「戦時下自由学園の美術教育運動：「美術」と「工芸」の重層的展開をめぐる」『生活大学研究』Vol. 2 自由

学園最高学部 pp.9～25 等がある。

- (41) 執筆者不明 (1922)「洋服講習会のご報告」『婦人之友』第 16 巻
第 9 号 pp.146～147
- (42) 前掲注 39、p.10
- (43) 同上、pp.10～11
- (44) 鳴海りよ (1925)「第七 調査の感想」『我が住む町』自由学園 p.88。
なお、当時左記の執筆者は予科生であった。
- (45) 同上、自由学園高等科三回卒業生 (1925)「『我が住む町』一私共の
卒業生について一」 p.3

(立教サービスラーニングセンター・JICE 研究員)